

# 巻頭言



数理学研究院  
COEプログラム離散数理論プロジェクト

## 坂内 英一 教授

かもオリンピックでより多くの金メダルの獲得を目指すかの如くである。この方向は分かりやすく、一般の賛同を得るのもたやすい。しかし、問題はそう単純ではない。研究とスポーツを同一視するのは、完全に誤りであるのに、それに気づかない研究者が増えてきていることが危ぶまれる。

100m競争なら、早い順に1着、2着で何も問題はない。体操のような採点種目なら高得点の順で異論はないだろう。だが、研究に関しては、はっきりとした順位付は出来ないという面、すべきでないという面、本当に優れた成果は金メダルを狙うような姿勢の研究からは生じないという面が存在する。研究業績の評価が確定する迄に、何十年もかかることは珍しくなく、何百年の例さえある。業績が出た時点での評価はほとんど無意味である。有名なあるいはインパクトファクターの大きい雑誌に発表された、沢山引用されている、高額的外部資金を得ている、それだから優れているというような評価は、非常に表面的で信頼の置けるものではない。科学の価値を理解できない人ほどそのような点数に頼りがちだ。官僚、政治家、ジャーナリスト、評論家と称する人々などが科学(者)を自分たちの管理下に置くためには便利な物差しだろうが、それは知らぬ間に科学自体を深く傷つけているのだ。

学生だったころ、A. Weil の「数学の将来」という小冊子(弥永昌吉訳)を読んだ。書かれたのは戦後直ぐの時期と思うが、数学の良いところはノーベル賞のような賞を持たないことで、それゆえ研究者は純粋に学問に対峙できるという趣旨のことが書かれていた。その通りだと思った。それが書かれてから間もなくフィールズ賞が再開され、次々と賞が増えて行ったのはご承知の通りである。一概に悪いとは思わないが、仕事のよしあしの真の評価者はやはり研究者自分自身であろう。今回フィールズ賞の受賞をPerelman が辞退した。私にその理由が分かっている訳ではないが、純粋な数学者の魂を持っている人がまだいたという意味で、爽やかさを感じた。余談であるが、本人が辞退しても委員会が授賞を決めたことが公になるやり方は非常にフェアであると思う。日本では辞退した場合はそのことが公表されない場合が多いが、そのやり方はアンフェアではなからうか。

COE にしろ、G-COE にしろ、馬ならぬ研究者に対する「人參」である。また両刃の剣である。効き目は確かでも、使い方によっては、あちこちにしわ寄せが出ることが懸念される。数学の、あるいは科学の研究は、長い目で見る必要がある。そのことを我々研究者はもっと自覚しよう。